

INTERNATIONAL ERIC NEWSLETTER

No.14

JANUARY 1993

エリック ニュースレター

国際理解教育・資料情報センター International Education Resource & Information Center

特集：みんなの考えていることは？

ERICも3年目。国際理解教育の推進をめざして、今、教育で求められていること、私たちがやりたいこと…などを模索しつつ、試行錯誤でまいりました。地盤固めとしてたいせつなこの時期を、たくさんのお力添えて有意義に過ごすことができました。どうもありがとうございました。次の3年間は「より広く、より具体的に」を目標に、ニーズに即ちその確に答えられるようがんばります。本誌も、これを機に内容、形とも一新します。今後とも、ご支援・ご協力のほど、よろしく願いいたします。

ERICアンケート・集計と声

ご協力どうもありがとうございました!!

11月末日までに153人の方からご回答いただきました。予想以上の回答率、また、様々なご意見やご声援をお寄せいただき、たいへん心強く感じております。事務局一同心よりお礼申し上げます。

ここで、集計結果とともに、ご意見もご紹介いたします。ERICの資料としてお預りするだけでなく、みなさまにお伝えすることによって、思いやアイデアが共有され、新たな連帯感のきっかけとなれば、また、より広く活かされてゆけば…と願っております。

1 関心をもってお読みいただいていますか。

はい131 いいえ0 内容による21 無回答1

2 関心をもってお読みいただいているのは、次のうちどれですか。

事例118 情報コーナー75 実践報告86 無回答2

3 ERICニュースレターはあなたにとってどのような意味をもっていますか。

◇国際理解教育の情報源

- ・国際理解教育の指針（小学校）
- ・世界の教育関係の情報入手（研究所員）
- ・国内の国際理解教育の動向を知る情報源（大学）
- ・新しい取り組み方を知ることができる（民間）
- ・授業で役に立つ資料の入手の情報網、参考図書等のデータベース的役割（大学）
- ・行政レベルではなく実践レベルでの日本の教育界の動きを知るための情報源（学生）

◇教え方の参考資料

- ・生徒を生かす生徒指導のあり方を考える、教科書指

目次

〈特集〉みんなが考えていることは？

アンケート・集計と声	1
ERICの今後の活動	3
人として生きることを学ぶ〈実践報告〉	4
野生動物の足跡とり〈環境教育アクティビティー〉	6
カナダで日本の環境教育を考えた〈参加報告〉	7
情報コーナー	8



導における同和教育的視点を考える参考資料(中学)

- ・生徒に興味ある授業にする方法を見つける(中学)
- ・内容は教科書と資料、方法はERICから(高校)
- ・人の交流を通じ授業を改善するもの(高校)

◇刺激

- ・世界的視野で考えるよう引戻してくれる(高校)
- ・日々の教育活動への刺激(小学、高校)
- ・従来とは違った角度から見る姿勢、態度が身につく(大学)
- ・教育を違った視点から眺められ、私にとってパイロット的役割(中学)

◇国際理解教育以外にも活用

- ・消費者教育と重なる点が多くてよい(消費者団体)
- ・「関心のない人にいかに正しく楽しく目を向けさせるか」に応えてくれる(精神障害者共同作業所)
- ・自分たちの作った資料がどう利用され得るかを知る手がかり(民間海外援助団体)

◇その他

- ・今の学校は雑事が多すぎ、人数や場所の制約を克服するための時間をとることができない(高校)
(資料としてはいいけれど、なかなか実践できない…というの現場の代表的な声では? — 編集部)
- ・具体的な実践資料集、全国の人の動きを知る情報紙、ERICスタッフの息づかいを感じる手紙(中学)
(多くの方にこう言っていたらうれしいですね。)

4 内容についてどう思いますか。

満足117 不満4 変えた方がよい25 無回答7

5 どのように変えるとよいと思いますか。(無回答33)

(複数回答、○の中の数字は回答の多かった順位)

- ① 国内の実践例を増やす
- ② 情報コーナーを充実させる(*その他参照)
- ③ 対象年齢を具体的にわかる
- ④ 海外の実践例を増やす
- ⑤ テーマ別コーナーを設ける(**その他参照)
- ⑥ 教科別コーナーを設ける

*その他—関心ある情報:

生涯教育、ゲームや遊びを生かした事例、社会科関連の事例、音楽や詩を通じた事例、教科内容をベースの広がりある実践例、大学の事例、現場の教師の実践、

外国語教育分野での実践例、子どもの声、研究会・発表の情報、海外の実践例や教材、園児への働きかけ、実践結果に対する客観的評価・分析の方法

**その他—関心あるテーマ:

人権・平和・人種・環境、開発、異文化理解、外国人労働者、身の回りの国際化、核・エネルギー、太平洋諸民族の生活と歴史、グローバルシステム

***その他—いろいろ

- ・実践をERIC編集者が取材(写真も)
- ・コピーしてそのまま利用できるワークシート
- ・体験談コーナー(教える立場も、教えられる立場も)
- ・問題点とその解決法、理論
- ・おとなを対象とする資料、価値観を扱う事例
- ・学校教育と社会教育や学校—地域—企業—NGOなどの連携による実践例
- ・統計・資料の充実、写真、図、絵を増やす
- ・開発途上国の状況を紹介

6 購読制についてご意見をお聴かせください。

ほしい80 ほしいくない3 値段次第58 その他7

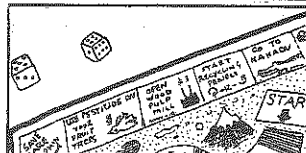
無回答5

(「ほしい」と言ってくたさる方が多いのは嬉しいかぎり。でも「値段次第」という現実的な判断をなさる方が多いのも事実。)

7 ERICを好きなように運営できるとしたら何をしますか?

A 教師の回答順位

- ① ネットワークづくり—他団体・個人との協力、情報交換、勉強会、実践者の共有の場づくり
- ② 研修—講師派遣、体験ツアー、ワークショップ、シンポジウム、関東以外での開催を増やす
- ③ 教材開発—ビデオ・スライド、副読本、ハンドブック(日本版『ワールド・スタディーズ』)
- ④ ニュースレター—月刊、世界のニュース、事例と情報を分ける、実践を取材掲載、図書紹介、研究グループ報告、テーマにエイズ・性教育を含める
- ⑤ コンピューター活用—パソコン通信、パソコン教材
- ⑥ 資料情報センターの充実—閲覧、貸出し、販売、広く使いやすい資料室、支局設立、公開授業の情報
- ⑦ 教育体制—教育委員会や管理職への働きかけ



- ⑧ 財源確保—大企業から寄付を集める
- ㉞ 調査・研究—アジア・太平洋地域の国際的協同研究

*その他

- ・全国の拠点でERIC実践例を迫体験、教材作成
- ・スタッフは現場の実態を知るため学校に出向き教師と話し合う。出前研修会を行う
- ・ニュースレターに必ずアンケートはがきを同封（切手は自己負担で意見を述べてくれる人を大切にす）
- ・ニュースレター専用ファイルを製作配布（B5判）
- ・官製教員研修・企業内研修などのプログラム作成
- ・ノウハウの紹介より、やはり生身の日本の子どもを相手にした学級経営、道徳、教科の実践が聞きたい
- ・国際理解教育のできる講師の人材バンク

B 教師以外のひとの回答順位

- ① 学校教育以外で裾野を広げる努力—地方自治体・公民館などへの働きかけ、婦人学級・高齢者クラブ
- ㉞ 教材開発—日本独自の教材、専門家や教師で教材作成チーム構成、事例集、開発教育テキスト、教師用虎の巻、社会教育担当者向きテキスト
- ③ ネットワークづくり—実践報告発表会、実践者の情報交換の場、支部を開設、会員同士で勉強会
- ㉞ 資料・情報提供—学校外教育（母親学級なども）の実践紹介、参考資料目録、ビデオ教材、海外の動向
- ㉞ 研修—ワークショップ、出前研修、地方開催、スタディ・ツアー
- ⑥ 民間団体支援—教師との橋渡し、教材開発の技術・財政的支援
- ㉞ 資料室の開放

*その他

- ・土曜朝、テレビで放送（民間環境団体）
- ・あらゆる尺度から「違う」人々について理解を促す部門を作る（精神障害者共同作業所）
- ・もっと学校現場に入れるよう営業活動を積極的に（元国際交流団体）
- ・大討論会や、衛星放送などを駆使した地球規模のイベント。大学のESSサークルを巻き込む（大学生）（既に実施中のこともあります。すべきことや、やりたいことは本当にいっぱい。みんなで夢を育ててゆけるERICでありたいと努めています。）

ERICの今後の活動

4年目にあたって、ERICが力を入れていきたい活動を、アンケート結果も踏まえて、現在、検討中です。

●研修

手法の紹介はERICの役割として強調できると自負しています。どう学ぶか、どう伝えるか、どう教えるか…「手法」があちこちで応用されるよう研修の場を増やしたいと思います。「聞いたことは忘れる、見たことは覚える、やったことはわかる、見つけたことはできる」を信じて。

●教材開発

ニュースレターへの声で最も多かったのは「国内の例を増やす」「海外の資料そのままでは学校でやりにくい」です。ご紹介した事例が、国内で実践を経て、できるだけ多くの現場で利用しやすいものへと磨かれ、再びご紹介できるようになるのはERICの夢でもあります。ただ、そのためには、みなさんからのフィードバックに頼らざるをえません。教材研究会にも今後さらに力を入れていきます。

●ニュースレター

ネットワークづくり、情報交換、事例や実践報告など、期待は極めて高いことが改めて判りました。ただ、1部100～300円、年間購読3千円が妥当という回答が多数で、実費（1部あたり送料72円、印刷費約130円、翻訳・編集費260～400円）を考えると…！ちなみに発送はボランティアの皆さんが頼りで、いつも四苦八苦。2人ほどで3～4日かかることも。前回、「発送大会」と銘打って何とか7人確保、初めて1日で完了という快挙でした。

次号からは、次のような刷新を考えています。

①情報紙（A4かB5の4ページ）

内容：イベント・文献・研修会・資料などの紹介
頻度：隔月刊

②事例・実践報告などの冊子（販売）

頻度：随時



人として生きることを学ぶ〈実践報告〉

識字問題を教材化した小学校の授業
ワールドスタディーズを創る会 池原 正子

〇本気になって仲間のことを考えさせたい

小学校5年生の子どもたちを担任した4月当初、教室の雰囲気は固かった。あちこちで悶着が起こっていた。何とか子どもたちの気持ちをほぐすことができないだろうかと、児童詩集『先生はいかんよ』（岡本博文編著、百合出版）から、「せんせい」や「友だち」という詩を読み合った。「こんな本当のことよう書くわ。ほくやったら書かれへん」「おれな、自分のことしか考えてへん。こんな詩みたいに、人のことなんか考えたことないわ」といった呟きが聞こえてきた。

校区に被差別部落があり、そこでは、部落開放運動が闘われている。学校でも、同和教育実践を中心にして人権学習を積み重ねてきている。仲間づくりにも取り組んできている。しかし、子どもたちに、差別と闘い、人権の確立のために闘っている人びとの内面にある「すばらしさ」を、一人の人間の生きかたをとおして学ばせきれなかった。また、人権を守る被差別部落の人びとの運動は一地域の問題解決のためだけでなく、広く世界とつらなる運動であることの認識をも育てきれてはなかった。それどころか、子どもたちは、校区に識字運動があることや、文字の読み書きができない人がいることも知らなかった。

こうした子どもたちに、人権抑圧の状況の中にあっても、その抑圧と闘い、「たくましく」「おおらかに」生きぬいている人びとに出会わせることで、人権問題をもっと身近にとらえさせたかった。何よりも、「識字に行って字一つおぼえるごとに、気持ちが大きくなる。一字一字おぼえるたびに、仲間と力をあわせて生きていこうという勇気がわいてくる」という体験に学ばせ、本気になって、学ぶことの意味、仲間とともに学ぶことの喜びを自覚させたいと思った。

〇体験的学習を重視し、実感的に学ばせたい

そこで、教材に、校区の識字運動から生まれた作品『なんで自分だけ、学校へ行けないのか』と、スライド『コロンビアのストリートチルドレン＝ファニトとマリア』

（ユニセフ制作）を主に活用することにし、次のような学習計画を立てた。

第1次 ストリートチルドレンのスライドや、文字を識る喜びを綴ったファニトの手紙（ストリートチルドレンといわれる他の子どもが書いた識字作品をファニトの手紙に改作）から、彼らの暮らしや気持ちを考える。

第2次 文字を識らないことの苦しみを模擬体験（大阪の地下鉄料金表をハングル文字で書き、自動販売機で切符を買う、この体験が、後日、韓国、朝鮮について学ぶ機会をスムーズに生み出すことにつながった）し、生命に関係した事実から文字を識ることの喜びを考える。

第3次 校区の識字運動から生まれた作品を読み、作者から聞き取りをし、差別や抑圧が人間にもたらしたこと、文字を奪い返すことがそれとの闘いであったことを考える。

第4次 文字を識った喜びを版画に表現することにより、人権問題への理解を深める。

この学習計画を立てるにあたって、いくつかのことを工夫した。1つは、世界の人権問題や世界各地での識字運動と比べながら、自分たちの人権問題や身近な識字運動を知らせていこうとしたことである。身近な被差別部落の人々の被差別・反差別の体験を、個人の、あるいは一地域のこととしてでなく、普遍的な人権問題として考えさせた。2つは、学ぼうとする者が自分たちの暮らしを見つめなければ、世界の人びとの暮らしを見つめることができないと考えたことである。他者を知ることを通して、「自己を知る」ことを確かにさせ、同時に、自己を知ることを通して、他者をより確かに認知させていこうとした。3つは、できるだけ体験的学習をさせ、実感的に学ばせようとしたことである。そのために、①文章からだけでなく映像からも読みとらせる②文字を識らないことは不便さの問題だけでなく生命の問題であるという苦しさ、文字を識ることは自己を解き放つ喜び、こうしたことを実感できる模擬体験をさせる③表現活動など、創造的想像力を発揮できる追体験学習をさせる——という体験的に学ぶ方法で学習を組織しようとした。

〇他者への理解と自己への信頼は表裏の関係

ストリートチルドレンの多くは、発展途上国の子どもたちである。自分と家族の生命を永らえるため、ありとあらゆる「仕事」をこなし、ありとあらゆる「悪」にま



みれながらも、生きぬこうとしている。もちろん文字を学ぶ機会も奪われている。そうした子どもたちのことを紹介するスライド『ファニトとマリア』を見せた。

家族を飢えから守るために靴磨きをしている13歳のファニト。宝くじを売る9歳の妹マリア。働く場所も寝る場所も汚れた路上。残飯をあさる子どもたち。そうした子どもたちを待ち受ける「いやがらせの暴力」。暴力には暴力でしか抵抗できず、遂に暴力でしか自分を守るこのできない子どもたち。独りぼっちの寂しさや、誰からも愛されない辛さ、将来に何の希望もない苦しみ。それらを忘れるためにシンナーやボンドを吸う子どもたち。

深夜まで働き続ける子どもたちの姿、そして、自分に何の価値も見い出すことができず、自暴自棄になっている同年代の子どもたちの姿に、クラスの子どもたちは衝撃を受けた。

スライドを見終わって、「あの子、ごっつい青あざあったなあ」「ゴミ箱をあさっていた子、腹いたおこさへんやろか」「5つくらい小さな子も働いてたやんか、考えられへんわ」「シンナー吸うてた子、かわいそうでたまらんかったわ」「どの子の顔も寂しそうやったなあ。あの子らも、つらいねんな」。口ぐちに話していた。後で、次のような感想を書いた子どももいた。

「…ぼくは、学校へ行くのはあたりまえと思っていた。でも、このスライドを見て、あたりまえじゃないことがわかった。5才ぐらいから仕事をすると聞いたので、そうしないと生きていけないんだなあと思った。子どもを捨てて、どこかへ行ってしまったお父さんもつらかったと思う。つらいことを忘れるためにシンナーを吸って、頭がおかしくなる…」(健次)

「…家族に暴力をふるわれてにげてきて、また町で暴力をふるわれて、最後には、暴力をふるう人間になってしまう。せっかく生まれてきたのに、やりたいことをやる前にうえ死にしたり、病気になったりして…」(亜希) こうしたストリートチルドレンのために、十数年前から、非政府機関が中心になって、様々な活動がなされている。識字学校もその1つである。スポーツやリクリエーションの機会も設けている。これらの活動を通して、人として生きる喜びを仲間と共に創り出そうとしている。

識字運動に参加し、文字の読み書きができるようになったファニトの目が変わってきていることを、スライド

の画面に見つけた。ファニトの手紙から、文字を識ると、自分や自分の周りのことが理解できるようになることに気づいた。そして、言葉を交わさなくても平気であったクラスの子どもたちは、これまでの「仲間づくり」を見直すようになっていった。

物質的に恵まれているものの、愛情に飢え、心に痛手を受けている子どもたちが、このクラスにもいる。その子どもたちは、身も心もすきんでいくストリートチルドレンの姿に、共感するものがあったようだ。

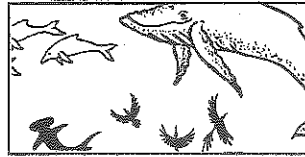
スライドを見て、ファニトの手紙を読んでから、子どもたちの間に変化の兆しが見えはじめた。腕力の強い子どもが幅をきかせなくなった。少しずつ言葉で言えるようになり、友だちを傷つけていた言葉遣いが減ってきた。人と人がつながるのは暴力ではダメだと気づいてきたようである。「やっぱり、言葉で、文字で考えなあかんねんな」と考えるようになってきた。グループで教え合う場面も見られるようになってきた。

○ワールドスタディーズの理念を重視

学習計画の第1次だけでも、子どもたちに変化の兆しはあった(字数の都合で第1次の実践のみ報告)。この変化は、第2次以降、より確かなものになっていった。

文字を識って初めて生きていてよかったと感じるようになった人たちの優しさに共感したり、生きる力に学ぼうとしたりする子どもたち、また、友だちに優しい言葉をかけられる子どもたちが増え、教室の雰囲気は柔らかくなっていった。教科の学習においても、子どもたちの目の色が変わっていった。自分の言葉を大切にしながら、家庭や学校のことを対話できるようになり、一人ひとりが仲間のことを考え、自分にも誇りをもちはじめた。さらに、遠くにあった人権問題をより身近に感じていった。

識字問題の教材化は、子どもたちにとっても、担任の私にとっても大きな意義があった。それも、ワールドスタディーズの理念でもって教材化したからであった。『世界』という視座から物事を考える姿勢、人間は相互依存(互いに関わり合い、作用し合う)を抜きに語れないという視点を教育実践のすみずみまでゆきわたらそうといった理念を教材化の過程で大事にしようとしたからであったと思う。



日本人の自然観と環境教育

成城学園初等学校 飯沼 慶一

近年、急激に自然破壊が進んでいる。日本もその例外ではなく、これは、科学の発達や明治以降の西洋化された自然観による影響が大きいといわれている。

日本の自然観は、古来、八百万の神に代表されるように、自然の中のあらゆるものの中に神がいると考え、人間と自然の間に明確な線を引かない。それに対し西洋の自然観は、キリスト教思想に見られるように、神は一人で、人間のために自然がつくられたという考え方で、自然と人間の間に明確な線を引く。

日本文化の特性としては、「盆栽」や「枯山水（日本庭園）」に見られるように、美しい自然を自分たちの身近なところにおきたいという欲望がある。外の自然を楽しむよりも、家に持ち込んでしまうのである。

日本における環境教育の教材は、こうした日本文化の自然観や特性を念頭において開発していくべきであろう。次のアクティビティーは、自然を傷つけずに、自然からのおみやげを一人ひとり家へ持ち帰ることのできる日本人向けのものだと考える。

図1

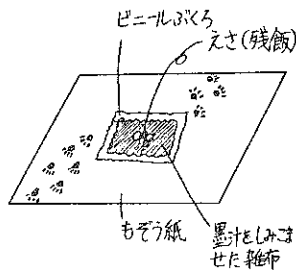


図2



環境教育アクティビティー

野生動物の足跡とり

ねらい：タヌキなどの野生動物は、普段は人間の目にはほとんど触れずに生活している。しかし、彼らの生活は、キャンプ場・都市近郊区などで、人間とかかわりあいをもっていることが多い。

この活動では、野生の動物が身近に生息していることを知るとともに、それらに積極的にかわることにより、動物たちの生きざまを知ったり、動物と人間の関わりを考えたりする入口とすることをねらいとする。

対象：小学生以上

季節：一年中（積雪や凍結のあるところは不可）

場所：キャンプ場や森・林などの野生動物の棲息地。（都心部で、のら犬・のら猫で行ってもよい。）

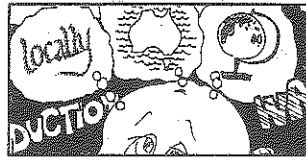
用意するもの：墨汁、模造紙、雑布、残飯、哺乳類の図鑑（足跡がのっているもの）

手順：

- ① 墨汁・模造紙・雑布を使って動物の足跡をとる方法を考える。
- ② けもの道など動物の通りそうな所を捜し、仕掛けをセットする。（左図1参照）
- ③ 次の日の朝、足跡がとれているかどうか見に行く。
- ④ 何の足跡であったか、何を食べたかを調べる。また、墨のつき具合で、どのように餌を食べたか、どちらへ去って行ったかを探索、推理する。
- ⑤ とれた足跡は、コピーしたりパウチしたりして、各自「おみやげ」として持ち帰る。（左図2参照）

指導上の留意点・その他：

- ① 餌付になってしまわぬように、餌をやりすぎない。
- ② この活動をきっかけとして、野生動物を使った色々なプログラム（例えば餌の嗜好性など）に発展させることができる。この発展活動については、できるだけ参加者が考えるようにする。



カナダで日本の環境教育を考えた

YMCAアジア青少年センター 森 良

10月中旬に10日ほどカナダへ環境教育を学ぶ旅に出かけた。前半はオンタリオ州天然資源省とカナダ野生生物連盟の主催するプロジェクト・ワイルドのワークショップ、後半はトロントで開かれたE.C.O-E.D (A World Congress for Education & Communication on Environment & Development:環境と開発についての教育とコミュニケーションのための世界会議)への参加であった。

この旅で、北米の環境教育の概要をつかむことができ、また、多くの刺激を受けることによって、日本での環境教育の課題を鮮明にして帰ることができた。

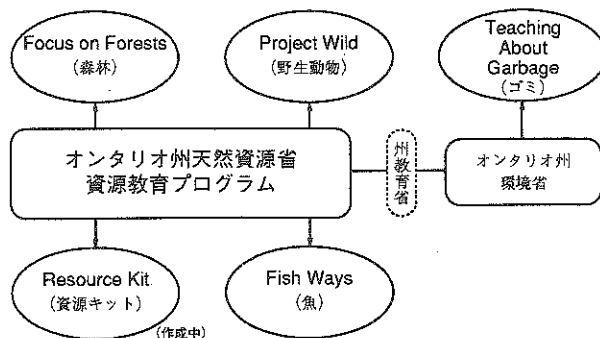
○風土に根ざした教材の開発と普及

第一の収穫は、北米での環境教育の1つの典型としてオンタリオ州の実態に触れることができたことである。

下の図のように、オンタリオ州政府は、(私が知り得た範囲で) 独自に5つの環境教育プログラムを持っている。プログラムの作成にあたっては、カナダ野生生物連盟やオンタリオナチュラリスト連盟などの民間団体がイニシアティブをとって教育コーディネーター、教員、フォレスターなどによるプロジェクトがつくられ、数回の研修(ワークショップ)と実践(トライアル)を踏んで完成させるというプロセスをたどる。

普及のシステムも整備されていて、ワークショップに参加してコンセプト(理論)とスキル(方法論)についてのトレーニングを受けないとテキストがもらえない。

オンタリオ州天然資源省資源教育プログラム



手法としては、アクティビティ(シミュレーション、ゲームなど)によって理解を促すという方法が基本になっている。この方法の利点は、教材化やマニュアル化しやすく、誰にでもすぐ指導できることであり、すみやかな普及に適している。

カナダは、森林、海、湖沼、河川に恵まれ、天然資源の豊富な国なので、「天然資源の永続可能性(Sustainability)へのアプローチ」が環境教育のキーコンセプトになっている。圧倒的なウィルダネス(原生自然)の世界で、日本とは自然環境が質的に違う。

日本では〈半自然の保全〉がキーコンセプトになるが、そこでも循環型社会に向かったの農林漁業の健全な再建が欠かせないので大いに参考になるだろう。

○環境の保全と公正な発展のための教育

E.C.O-E.D.Oは、6月に行われた「地球サミット」で採択された「アジェンダ21」の教育とコミュニケーションの項を深め実践に移すために開かれ、64カ国から3000人の参加があった。

「地球サミット」の基調理念は、「持続可能な発展(Sustainable Development)」であった。これは、環境に過重な負担をかけることなく、恒久的な人類の営みが存続し、文化遺産を豊かにする発展(development)を意味する。

リオに結集したNGOは、「アジェンダ21」に盛り込まれた「持続可能な発展をめざす教育(Education for Sustainable Development)」を「環境保全と社会的に公正な発展のための教育(Education for environmentally sustainable and socially-equitable development)」として深め、実践しようとしている。

日本においては、〈地域社会の共生的発展〉と〈アジアの共生的発展〉という目標になる。アジアの民衆の自立的な発展に寄与する具体的なプロジェクト(例えば農林業の指導者養成の学校)を含めて、里山の再生とエコシティの創造をすすめることである。

私たち環境教育トレーナー研究会は、環境教育をすすめるすべての人々と協力して、民間の環境教育の情報センターをつくり、日本の風土に根ざした教材の開発と普及をはかっていきたい。ご協力をお願いします。



情報コーナー

○お知らせします

〉 国際理解教育の公開授業 2月18～19日
「学習公開・初等教育研修会」は、各教科・道徳、総合活動、特別活動、国際教育の教育課程全領域にわたって筑波大学附属小学校の教師が授業を公開。次に12の分科会で、提案授業を含め協議を行う。

国際教育のモデル授業（小学5年）と講演
講師：米田伸次・関典子（18日11時より）
問い合わせ：筑波大学附属小学校・初等教育研究会 TEL 03-3946-2014

発信：臼井忠雄 筑波大学附属小学校

〉 開発教育セミナー～「参加型学習活動」の理論と方法、「ワールド・スタディーズ」を素材にして（定員30人）1月23～24日

これからの開発教育のあり方や方法論の見直しと共有、ネットワークづくり、スタッフ養成などにもつなげていく予定です。
神戸学生青年センター（講師：関典子）
問い合わせ：国際子ども権利センター
TEL・FAX 06-375-5466

発信：栗野真造 アムネスティ大阪事務所

〉 環境教育研修会

① 1月19日～3月5日（全10回）

都市と環境～自然を体感するプログラム
品川区南大井文化センター（講師：阿部治、飯沼慶一） TEL 03-3764-6511

② 1月27日～3月10日（全10回）19～21時
めざせエコリーダー（未来世代の生きる権利のために）

指導者：環境教育トレーナー研究会
足立区青少年センター
TEL 03-3890-0061（村上）

③ 2月19日（金）9～17時

教育系大学教官研究集会
第7分科会「生物の多様性と環境教育」
第8分科会「環境教育の指導者養成」
東京学芸大学338教室（定員204名）

問い合わせ：自然文化誌研究会
TEL 0423-25-2111（内線2925）

④ 2月20日（土）9～16:30時

環境教育セミナー

1 国際理解教育と環境教育（講師はERIC企画委員の角田尚子）
2 開発教育と環境
3 高校生の日本語ボランティアと開発教育
4 アジアの農村社会と環境教育
5 講演「農村社会学と異文化理解」

東京学芸大学338教室（定員204名）

問い合わせ：自然文化誌研究会

発信：森良 YMCA アジア青少年センター
TEL 03-3233-0611 FAX 03-3233-0633

○いっしょにやりませんか

〉 「アースティこどもの国」環境教育プロジェクト（4月18日神奈川県こどもの国）

「環境教育を日本で浸透させたい」社会人や学生が、昨年に引き続き今年も一大イベント環境教育フェスティバルを企画中。コンサート、シンポジウム、写真展、ワークショップなど様々なプログラムを予定。企画・運営のためのスタッフを募集しています。できる範囲の参加でOK！ぜひ、ご連絡ください。詳細は下記に。

発信：実行委員会 真淳平
TEL 044-988-7275

〉 国際理解教育を児童英会話教育に

国際理解教育の分野から、人権、環境、異文化理解、平和などを英会話教育のカリキュラムに反映させて、「英語の言葉」を習うだけではない、「国際コミュニケーションのための英会話」を企画、運営する方法をワークショップ形式で講習を行うTEACHERS CIRCLEが発足しました。次のワークショップは、2月9日（火）と、3月14日（日）または、16日（火）、いずれも10～13時 八王子市内。

入会、講習参加の問い合わせは下記に。

発信：吉村峰子 TEL 0426-56-1990
グローブ・インターナショナル
〒192 東京都八王子市元横山町2-11-7 3F

○資料のご寄贈ありがとうございました
『教育研究』10月号（特集・思考の拡散と収束）、11月号（「感じること」と「表すこと」）筑波大学附属小学校初等教育研究会
『アオコに挑んだ地球市民』奥井登美子編著 北斗出版

『国際理解教育研究—道徳科の授業を通して』永久欣也 光華紀要第12集抜粋
『半地球・松本洋写真帖』河出書房新社

○今、ERICでは…

〉 グローバル・セミナーの準備すすむ

来年2月6～7日に、セミナーの開催を予定しています。講師は、米国から『食べものから世界を見つめる（仮題）』の著者ローリー・ルービン氏が来日、国内で最も熱心に実践・研究活動に取り組んでいる現場の先生方にもお願いします。講演だけでなく、模擬授業を体験することで内容を十分に理解し、さらに、実際に授業・活動案の作成もしてみようというプログラムです。

〉 ERICの翻訳教材第4段！

『フード・ファースト・カリキュラム—食べものから世界を見つめる（仮題）』食糧を巡るエネルギー、福祉・社会、飢えと人口などの問題を、国語・算数・理科・社会・音楽・図工・家庭科で楽しく学ぶ総合カリキュラム。活動案とコピー用ワークシートがいっぱい。対象は小4～中2が中心、社会教育で応用するヒントも充実。本書を基に、学習指導要領にどう対応させるかなど、利用の手引きや資料改訂を読者参加で作る計画も進行中です。発行は93年2月の予定。税込価格2575円、送料は何冊でも1回400円。お申し込みはERICまで（なるべく書面でお願いします）。

〉 アンケートに「無料なのが以前から気になっていた」と書いたり、切手を同封したりしてくださった方がたくさん。ほんとうにありがとうございました。（編集担当）

ERIC

International ERIC NEWSLETTER No.14 January 1993

国際理解教育・資料情報センター

〒114 東京都北区田端1-21-18 津田ビル1F 電話=03-5685-1177

このNewsletterの印刷・編集費用の一部は大竹財団からの後援です。

リサイクルを考えて、印刷用紙に再生紙を使用しています。